

特別支援学校における見ることの支援の基礎と実践

| | |
|-------|----------------------|
| 企画者 | 奥山 敬 (東京都立光明学園) |
| | 松本健太郎 (東京都立多摩桜の丘学園) |
| 司会者 | 粟井 麻実 (東京都立北特別支援学校) |
| 話題提供者 | 中野 泰志 (慶應義塾大学) |
| | 堀川 順子 (奈良県立奈良養護学校) |
| | 八尾 絢理 (京都市立呉竹総合支援学校) |
| | 木澤 健司 (東京都立墨東特別支援学校) |
| | 松本健太郎 (東京都立多摩桜の丘学園) |
| 指定討論者 | 佐島 毅 (筑波大学人間系) |

KEY WORDS: 視機能支援、重複障害、寄り添った支援

【企画趣旨】

昨年の大会で開催した自主シンポジウム「特別支援学校における見ることの支援に関する各地域の活動の成果と課題」では、1996年のATACカンファレンスをきっかけに始まった都立村山養護学校小低部(当時)での中野らによる継続的な支援と、その後の京都、奈良、東京における見ることの支援の取り組みの成果と課題について概観した。その中で、見ることの支援に関する情報は、どこにいても利用可能であるという状態にはなっていないことが指摘され、継続的な注意喚起に取り組むことが必要であることを確認した。

今回は、見ることの支援の基礎と多様な取り組みを概観することを通して、見ることの支援に関する情報を広く共有していく方法を探っていきたい。

【話題提供者の要旨】

話題提供1：見ることの支援の基礎(中野 泰志)

視覚は、離れた場所にある対象の存在やその対象がアフォーディングしている情報を能動的に知ることができる極めてユニークな感覚である。視力や視野等の視機能に障害が生じ、視覚からの情報が取得出来なくなると、移動や読み書き以外に、概念形成やコミュニケーション等の日常生活や社会生活にも大きな影響が出てくる。本シンポジウムでは、見えにくさのタイプを考慮した環境整備の方法について話題提供する。また、見ることの意味を創造するやり取りの重要性について指摘する。

話題提供2：視機能の教育的評価について(堀川 順子)

重複障害のある子どもたちに何らかの視覚的弱さがあると把握していても、一人ひとりの見え方に確信がもてるような視覚的評価のツールは残念ながらまだ十分に確立されていない。しかし、学習活動では、教材の提示位置、提示距離、背景と提示物との関係において、大きさ、色、距離など、どのような教材が視覚的に有効なのか、かかわる教員チームで実態を把握し、共通理解を図りながら取り組む必要がある。子どもたち一人ひとりに応じたアプローチをトータルで考える上で、視覚も大切な情報を取り込む間口の一つであると思う。TAC(テラーアキュイティーカード)など他覚的評価が可能なツールを使いながら、少しでも確からしく、個々の見え方に迫ることができれば、より豊かな生活につながることができるのではないかと考える。

話題提供3：校内の支援体制について(八尾 絢理)

京都市の、総合支援学校感覚障害教育研究会では、事例検討、疑似体験等を通して研修を積んできている。事例検討で、校内でアセスメントをした結果と今後の指導の方向性について、講師よりの確かな助言・指導を受けた教員が刺

激を受け、「見ることの支援に関する専門性」の重要性に気付き、感覚障害についての専門性を身に付けたいと、研究会での活動を継続している。今回は京都市の教員を支える校内支援体制の一つについて報告する。

話題提供4：視線入力取り組み(木澤 健司)

児童生徒の運動の制約は、環境へ働きかけることの制約につながり、能動的に環境に働きかけても環境の変化が不確定であったり、不明瞭であったりする。このような環境が整わない状況では、学習への動機づけは低い。しかし、視線を意図的に動かすことができる児童生徒は、機器を用いることで環境の変化が明瞭であり学習を積み重ねることができる。支援者は、すぐに意思伝達装置として使用することが素晴らしいと思う。一方、児童生徒はコミュニケーション機器として活用することを希望するとは限らない。そこで、視線を用いた学習の段階を考慮し、子どもに寄り添いながら学習活動の検討を進める。

話題提供5：リーフレットの概要(松本健太郎)

見ることの支援に関する情報を広く共有していく方法の一つとして、昨年の自主シンポジウムの登壇者及び参加者を中心に「見ることの支援の基礎」というタイトルのリーフレットを作成した。リーフレットは、1 見ることの支援が必要な理由、2 視機能の教育的評価、3 見ることの支援の基礎、4 支援の事例、5 医療機関との連携、6 校内の支援体制、7 まとめ、の7項目から構成される。他の話題提供では、扱えなかった内容を補足しながら、支援者の気づきを促すような活用の仕方を参加者とともに考えていきたい。

【指定討論者の要旨】

指定討論者1：個別性に立脚した教育への示唆(佐島毅)

話題提供をいただいた実践知から、感覚からの情報入力・フィードバックの把握の重要性と、主体的・能動的な学習活動の根幹をなす感覚に応答する学習環境・教材の工夫について、議論を深めたい。そして、障害の重い子どもを含めた、個別性に立脚した教育の本質をフローと共有したい。

【文献】

中野泰志(1999)教育的な視機能評価と配慮. 大川原潔ら(編), 視力の弱い子どもの理解と支援. 教育出版, 60-70.
佐島毅(2007)視覚に障害のある子どもの指導. 日本肢体不自由教育研究会(編), 肢体不自由教育の基本とその展開, 慶應義塾大学出版会, 188-207.

(OKUYAMA Takashi, AWAI Mami, NAKANO Yasushi, HORIKAWA Junko, YAO Kenri, KIZAWA Takeshi, MATSUMOTO Kentaro, SASHIMA Tsuyoshi)